

トーマス・マン著 リカルダ・フーフ60歳の誕生日  
によせて (1924)

メタデータ	言語: jpn 出版者: 明治大学教養論集刊行会 公開日: 2016-09-30 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 永川, 聡 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10291/18098">http://hdl.handle.net/10291/18098</a>

## リカルダ・フーフ<sup>1)</sup> 60歳の誕生日によせて (1924)

トーマス・マン 著  
永川 聡 訳

本日この日<sup>2)</sup>をドイツ女性の日と呼ぶべきでしょう。いや、ドイツ女性の日にとどまるものではありません。というのも、ここに讃える人はドイツ第一の女性というばかりでなく、おそらくは今日、ヨーロッパ第一の女性だからです。

ラーゲルレーヴ女史<sup>3)</sup>は叙事的な本能を持った真に偉大な物語作家であり、一個の自然であることに疑いの余地はありません。しかし、彼女の精神性は、善意から発したいくつかの人道主義的な (humanitär) 理念を超えることはありません。その理念は彼女の作品を心温まるものにしてはいえ、その作品に知性主義の香りを与えることはこれまでもずっと出来ませんでした。フーフ女史の場合は事情が異なります。芸術や創造性に関して実に怪しげな考え方が一部で広まっている彼女の国、つまり私たちの国ドイツにおいては、もし彼女がもう少し愚かで、純粋な女性詩人 (Dichterin)、あるいは無意識の所産として単純素朴な姿で現れていたならば、彼女は尊敬されるだけでなく、もっと親しまれもしたであろうことは想像に難くありません。しかし、彼女は純粋な女性詩人以上のもの——いや、それ以上と言うよりは、同時にまた、それと表裏一体の分かちがたいものでもあるのです。つまり彼女は、意識の王国における素晴らしく明晰な統治者にして、この王国の拡張者、一言でいえば偉大な女性作家 (Schriftstellerin) なのです。しかし、

まさしくこの点に、フーフ女史が、世界的、時代的、将来的にも、愛すべき彼女の北欧の姉より重要である所以があります。フーフ女史の考え方に従えば、彼女はそうした特質を持っていることによって、ラーゲルレーヴ女史より女性的でさえあるのです。

今から25年前、彼女は一冊の本を著しましたが、その本は、刊行当時の1899年より今日のドイツの精神的状況に一層ふさわしい内容を持っています。その本は、ようやく最近になって我が読者層にも親しまれるようになったタイプの作品、時代の激動を経てようやく彼らが求めるようになったタイプの作品を先取りしており、もしその本が今日出版されたなら、カイザーリングやシュペングラ、グンドルフやベルトラムの作品<sup>4)</sup>と同じように、間違いなく多くの議論を呼び、大いに求められていたことでしょう。私は、彼女がドイツ・ロマン派について著した二巻本<sup>5)</sup>のことを言っているのですが、この二巻本は、その論じる対象が持つ水準と同等の、つまりドイツで最高の、いや、世界でこれまでに達した中でも最高の本なのです。この本の中で彼女は述べています。

「というのも、永遠に女性的なもの (das Ewig-Weibliche) とは、まさに救済の原理、すなわち無意識的なものを意識化することであって、エヴァが認識の木の実をもぎ取った時に始めた無限の革命 (unendliche Revolution) のことを指しているのである。ゲーテがそのことを意識していたか否かにかかわらず、このしばしば軽率に使われる『ファウスト』結びの言葉<sup>6)</sup>は、臨終の際に彼が口にしたと言われる例の「もっと光を」と同じ意味を持っている。ゲーテがより高い段階 (höhere Stufen) に憧れ、また、その段階があると信じていたことほど、彼の人間的偉大さを証明するものはない。」

世間でまかり通っている偏見とは全く逆に、女性的な原理とは、朦朧としたものや自然や本能に支配された原理ではなく、むしろ意識化や認識といった「より高い段階」に導く革命的な原理なのである、と述べる上の文章によって、この本のテーゼはほぼ語り尽くされています——彼女が論じた対象がロ

マン派であったことから、そのテーゼも必然的に出てくるのです。というのも、彼らロマン派は、私たちの偏見が思い描くような典型的な「女」を蔑んで見下していたし、この同じ偏見が依然として好んでイメージするような「男」も同時に否定していたからです。彼らはこれら二つのグロテスクで誤った願望像に対して、全人 (Ganzmensch) や両性具有者 (Androgyn) という理想像を、あるいは人類にその目標を指し示したという、あのヤーコプ・ベーム<sup>7)</sup>の「ゾフィー (Sophie)」といった理想を対置したのです。フーフ女史はフリードリヒ・シュレーゲル<sup>8)</sup>の文章を引用しています。「過剰な女性性ほど醜いものはなく、過剰な男性性ほど厭わしいものもない。そうした類のものが、我々の慣習や意見の中で、いや、比較的レベルの高い芸術の中でさえも幅を利かせている。[...] 我々は両性の性格をもうこれ以上誇張する必要はなく、むしろ双方に重しを載せてバランスを取るように努めなければならない。[...] 穏やかな男性性と自立した女性性だけが真正かつ美しい男性性と女性性である。[...] 一般的に理解され、喧伝されている男性性と女性性は、実のところ最も危険な、人間性の実現を妨げるもの (*Hindernisse der Menschlichkeit*) なのである。」——この言葉は当時間も傾聴に値する言葉であったし、ただおとなしいだけの牝牛の姿に女の理想を見出し、荒くれ者の姿に男の理想を見出す傾向が未だに強く残っている私たちの国にあっては、今もって傾聴に値する言葉です。

ゲーテの描く男性主人公たちの性格にはいつも「何か女性的なもの」が付きまとっている、と非難めいた口調で言われていますが、以下に引用する詩行は、そのゲーテの手になるものです。

「なぜなら、女性たちの本性は  
 芸術と近い関係にあるのだから。」  
 (Denn das Naturell der Frauen  
 Ist so nah mit Kunst verwandt.)

一体どうしてでしょう？ 女性たちが「自然」であって、芸術の中にも自然や本能や無意識に関係することを全面的に見出すことができるからでしょうか？ — いいえ、違うのです。芸術は自然ではありません。その反対です — いくつかの概念を正しく秩序立てることが生死を分けるほど重要になる場合があるのです。精神と自然という二つのものを第三の国の中で (im Dritten Reich<sup>9)</sup>) 融合させることが人間性の目標なのですが、この二元性との関係において、芸術は完全に精神の側に属しています。芸術は精神なのです。というも、芸術はその本質から言って、意味であり、意識であり、統一であり、意図であるからです。ノヴァーリス<sup>10)</sup> が「ヴィルヘルム・マイスター」<sup>11)</sup> のことを、「完全なる一個の芸術作品であり — 悟性の作品」と呼んだとき、彼はそのことを言っていたのです。ロマン派の人々は芸術の概念を、本能的なもの、自然なもの、無意識的なものの対立物としてしか理解しませんでした。もちろん彼らも、また彼らのことを描いたフーフ女史も、最も繊細で豊かな精神の教養であっても、ただ自然だけが授けるもの、すなわち生の充溢を詩人に授けることはできないということ、「肉体は肉体的なものから産まれる」他ないということは、十分に心得ていました。しかしロマン派の人々は、フリードリヒ・シュレーゲルとともに、「芸術とは、花咲き、実り、やがて枯れることを定められた人類の青春の花に過ぎず、情熱的な心情や無意識的な自然人の感情の発露以外の何物でもなく、教養と学問の光に照らされれば消えてなくなる他ない甘い子供の夢でしかない」という偏見と戦った人々でした。彼らは、予感によって思考を先取りするような文学も知っていましたが、同時にまた、「明晰な思考と手を結び、それに付き従って行く」ような文学のことも知っていました。そして後者の文学の方を、彼らは「より優れた」文学、少なくとも今日の人類の段階によりふさわしい文学と呼んでいたのです。つまり彼らは、今日もなお依然として戦う意味が大いにあるものと戦っていたのです。すなわち、芸術と詩、少なくともロマン的な詩やドイツ的な芸術というものは、夢や純朴さや感情、あるいはもっと適当な表現で

言えば、「情緒 (Gemüt)」でしかあり得ず、「知性 (Intellekt)」とはおよそ関係ないものであるかのように考える、あの一般に膾炙した誤ったイメージと戦っていたのです。実際、ドイツ・ロマン派のことを極めて知性的な芸術-精神学派と呼ぶことができます。というのも、本能と意図、自然と精神、造形と批判、そして詩人氣質 (Dichtertum) と作家気質 (Schriftstellertum) が交互に浸透し合って、はじめてそこに、ロマン的な活動圏 (romantische Sphäre) が成立するからです。

詩人氣質と作家気質という対立概念がひどく悪趣味であることについて、ここで語る必要があるでしょうか？ そのように事物を分けることに意味があると考えて得意になるのは仕立屋か手袋屋だけです。そのようなことは必要ないでしょう。まともな人なら誰でも、その種の偏向に満ちた区別の仕方を見たら辟易するはずでしょう。そのような区別が真に「人間性の実現を妨げるもの」であることは、この種の区別を好んで行う人が、いつも決まって、反動的な人間、日常的な現実しか分からない人間、古くさい人間、粗野なくせに感傷的な人間、どこから見ても救いようのない人間であるという、まさにこの点からもはっきりしています。全くもってお笑い種です！ 時代の発展や生きた現実、敵意を持ったこうした連中の頭の上をとっくの昔に飛び越えてしまっているのですから。しかし彼らは、現実から目を逸らして、ドイツ的な詩人 (deutscher Dichter) と非民族的な作家 (unvölkischer Schriftsteller) に関するくだらないおしゃべりを繰り返すことをやめないのです。私たちは今ここで、そういった連中の存在とはおよそかけ離れた文学の現状について語る余裕はありません。すなわち、現代文学の分野において小説が主流であること、しかもその小説がまさに今、芸術形式としては危機の中にあること、しかしその危機の中から何か新しいものや見たことのないもの、より精神に富んだ何かが生まれるであろうこと、などについて語る余裕はありません。ですから、ここではリカルダ・フーフがその『ロマン主義の最盛期』の重要な箇所において述べていることを以下に引用するだけに

しておきましょう。

「ロマン派の人々によって発展させられた言語——その出発点はゲーテにあると彼らは考えていたのだが——を見ることで、意識の世界がそれ以来どれほど拡大したのかを示すことは大変おもしろい仕事であろう。小説 (Roman) が文学そのものの近代的形式であるとしたら、散文 (Prosa) は近代文学の言語である。散文は意識の自然な表現であり、詩 (Poesie) は無意識的なものの自然な表現である。ところで今、未来の理想が本能と精神、衝動と意図の合一にあるのだとしたら、未来の言語は散文-詩 (Prosa-Poesie)、すなわち詩的な散文か散文的な詩でなければならない。実際、詩が散文によつてますます脇へ追いやられ、その代わりに散文がますます詩的になっていることを、一体どうして隠し立てできようか？」

全くその通りではないでしょうか。すでに今日、詩に近づく——それが密かにであればなおさら良いのですが——ものになっていないどのような散文も読むに堪えないのではないのでしょうか？ 我々の耳が、ロマン派の後裔であるニーチェの散文を、いや彼の知的な音楽 (intellektuale Musik) を体験したことは無駄ではなかったのです。ここでこの言葉、問題を孕みながらもそれゆえにまた愛されてもいる、音楽という言葉が出てきてくれたのは幸いです。「というのも」、と我らが女性作家は別の箇所述べています。「散文と詩が対立しているように、また別の領域においては詩と音楽が対立しているのであって、この場合は詩が意識的なものを、音楽が無意識的なものを代表しているのである」。そして彼女は、あの音楽に魅せられた人、ヴァッケンローダー<sup>12)</sup> について語るのです。もし彼が、音楽の持つ「冒瀆的な無邪気さや、あの恐ろしい、神託のように曖昧な怪しさ (zweideutige Dunkelheit)」に戦慄を覚えなかったのなら、彼は真のロマン派ではなかったであろう、と。ヴァッケンローダーにとって音楽とは、「人間が抱くありとあらゆる多様な感情が作り出す夢の光景 (Traumgesicht) なのであって、音楽においてはそうした様々な感情が、ある時ははっきりした形姿も持たずに、

自らの楽しみのために、奇妙な、ほとんど狂気じみたパントマイムの踊りを一緒に踊るかと思えば、またある時は恐ろしいほど恣意的に、まるで見知らぬ謎めいた運命の魔の女神たちのように、我が物顔に乱舞するのである」。

「この感情は、光の聖なる救済力を予感しながらも、その光から逃避する際に夢想家が覚えるかすかな良心の不安 (leise Gewissensangst) なのである」、とリカルダ・フーフは述べています。ここで取り上げられている問題は、私たちの、つまりドイツ的な問題ではないでしょうか？ この「夢想家」とはドイツ人自身の姿ではないでしょうか？ というのも、ドイツ人は無意識的なものへの愛から、詩人と作家は違うものだと思いたがり、また心の中では、はっきりと分節された詩よりも音楽をはるかに優先させているにもかかわらず、その際、あの「かすかな良心の不安」から逃れられないのですから。ドイツ的な本質に対して形式や意識や明朗な世界との関係性を、つまり、世界の中での高貴さ (*Vornehmheit*) を与えようとした人なら誰でも、それによって我と我が身を傷つけて一層苦しむことになったとしても、ドイツの音楽が持つあの曖昧な怪しさの要素と戦わなければならなかったのです。そうなのです。もし音楽のことを「ドイツ的な人間性の実現を妨げるもの」とあえて呼ぶ人がいたら、私たちはその人のことを憎まねばならないでしょうが、密かにその人に対して賛意を表明しなければならないことになるでしょう。

私たちが言及し、今ここで考えを巡らせている諸問題は、まさしく私たちのお気に入りの問題群であり、思想群です。祝賀を受けるフーフ女史には、私たちがこの晴れの日を、それらの問題について論じるきっかけにすることを許してほしいと思います——この日はまさにそのきっかけとしてふさわしい日なのです。高貴さという問題、この問題が、自然と精神、意識と無意識の対立の中には含まれているからです。というのも、どちらの高貴さがより気高いのかという問題、つまり、精神がその子供たちに対して授けている高



貴さと、自然がその寵児たちに対して授けている高貴さのどちらが気高いのかという問題は、なかなか決着がつかないでしょうから。もし決着をつけたいのなら、まさに人間性 (Humanität) という言葉で呼ぶより他にそれ以上明確で美しい呼び名が見当たらない、ある第三のものの中で (in einem Dritten), この二つの対立するものが止揚されるしかないのです。

健康と病気の問題も、上述の問題と非常に親和性が高い問題であって、やはりこの連関の内にあります。意識は病気だからです——ロマン派の人々はそのことを知り過ぎるほど知っていました。しかし彼らは、すべての病気の中により高い段階への移行の表現を見て取っていたのです。「すべての病気は、それらが超越的なもの (Transzendenzen) であるという点において、罪によく似ている」(ノヴァーリス)。彼らはこの考えを宗教的なものに至るまで追求したのです。中世と古代の関係は、彼らにとっては精神と自然の関係に等しかったのであって、だからこそ彼らはカトリックの中世におけるまだひび割れていない調和を見て、これを愛したのです——しかし、この分裂を知らない調和の世界は、リカルダ・フーフの言葉を借りれば、「いわば無意識的で必然的な、それゆえ人間の功績によって出来たものではない、不確かな完全性の世界」でありました。それに対して、プロテスタンティズムは分裂でした——それは信仰心の点においては嘆かworthyものでしたが、花がしほみ、子供が成熟するように、不可避の成り行きだったのです。そのプロテスタンティズムは無政府状態にまで至ったのでしょうか——いや、それならそれで構わないのです！ なぜなら、シュレーゲルが言うには<sup>13)</sup>、「真の無政府状態」こそが「宗教を産み出す要素」なのですから。このような精神の持ち主たちが待望し目指していたのは、新たなカトリシズムという、再び取り戻された意識的で自由な、それゆえに確かな調和の世界、すなわち第三の国 (das Dritte Reich) に他ならなかったのです。ハルデンベルクの「ヨーロッパ、あるいはキリスト教世界」<sup>14)</sup> という論考は反動的なものではありませんでした。本来のより良き世界は未来にあると述べていた彼が、反動的な

考え方をしていたはずがないのです。ですから、ゲーテがこの論考を「アテネウム」<sup>1)</sup>に掲載させたがらなかったことは、第一級の誤解だったのです。この論考は、言葉のもっとも高貴な意味において、革命的な (revolutionär) ものだったのですから。それは、自然が道徳になることや、神が自らを浸透させてゆくことや、完全な自己意識を持つに至るまで発展した人間について教えてくれたのです。この論考が教えてくれたのは、宗教的な人間性 (religiöse Humanität) というものだったのです——あるいは、リカルダ・フーフが見事に言い表しているように、それは、「各個々人の魂の内にある王国においても、また、全人類で構成されている愛の共和国においても」実現が可能な調和について教えてくれたのです。

私たちは、ここに讃える女性の住む高みにまで上らなければなりません。そうしなければ、彼女に対する私たちのお祝いの言葉を多少なりとも意義のあるやり方で送り届けることもできなかったでしょう。この素晴らしい創造者にして偉大なるドイツの女性作家に対して、深い尊敬の念を込めて、お祝いの言葉を捧げたいと思います。

#### 《注》

##### 使用テキスト

Thomas Mann: Zum 60. Geburtstag Ricarda Huchs. In: ders.: Große kommentierte Frankfurter Ausgabe. Bd. 15. 1. Essays II 1914–1926. Hrsg. von Hermann Kurzke. Frankfurt a. M. 2002, S. 770–777.

##### 参照テキスト

Hermann Kurzke: Kommentar zu „Zum 60. Geburtstag Ricarda Huchs“. In: Thomas Mann: Große kommentierte Frankfurter Ausgabe. Bd. 15. 2. Essays II 1914–1926. Hrsg. von Hermann Kurzke. Frankfurt a. M. 2002, S. 472–478.

1) リカルダ・フーフ (Ricarda Huch, 1864–1947) はブラウンシュヴァイク生まれのドイツの女性作家。1887年、当時ドイツ語圏で唯一女性の入学が認められていたチューリヒ大学で学ぶためスイスに渡り、1891年、スペイン継承戦争時

のスイス連邦の中立政策に関する論文で同大学哲学部の学位を取得。学位を取得した最初のドイツ人女性のうちの一人となった。大学卒業後は図書館司書や女学校の教師の職に就きながらも、在学中から続けていた創作活動を精力的に展開。長編小説『ルドルフ・ウルスロイの回想 (1893)』によって文壇に地歩を築いた。その後も抒情詩、短編小説、長編小説を矢継ぎ早に発表し、多彩な創作の才能を示したが、同時にまた『ロマン主義の最盛期 (1899)』や『ロマン主義の普及と凋落 (1902)』のような批評的な文学史研究の書も世に問うた。壮年期以後は歴史や宗教に題材を求める傾向を強め、イタリア統一運動を取材した『ガリバルディの物語 (1906-07)』を皮切りに、三十年戦争を描いた『ドイツにおける大戦争 (1912-14)』や『ヴァレンシュタイン (1915)』、あるいは『ルターの信仰 (1916)』や『ミハイル・バクーニンと無政府主義 (1923)』といった歴史小説や評伝作品を多く手掛けた。1926年にはプロイセン芸術アカデミー初の女性会員として選ばれたが、1933年、ナチス政権指導部の圧力によりユダヤ人作家会員らが除名されると、それに抗議してアカデミーを離脱。以後ドイツにとどまり、一種の国内亡命を続ける中で、晩年は神聖ローマ帝国の盛衰を描いた三巻本の大著『ドイツの歴史 (1934, 37, 49)』の執筆に従事した。戦後、抵抗運動戦士たちの記録を伝記の形で遺す出版物の計画をしていたが、この計画は完全には果たせず、1947年11月17日、逗留先のフランクフルトで亡くなった。

- 2) 7月18日のフーフの誕生日のこと。なお、このエッセイは、1924年7月17日に、ブタペストの新聞 Pester Lloyd 朝刊号で初めて掲載された。その後、フランクフルト新聞をはじめとする、ドイツ各紙での掲載が続く。
- 3) セルマ・ラーゲルレーヴ (Selma Lagerlöf, 1858-1940) はスウェーデン中西部ヴェルムランド地方モールバック出身の女性作家。『イェスタ・ベルリング物語 (1891)』でデビュー。他に『アンチ・キリストの奇蹟 (1897)』、『地主の家の物語 (1899)』、『エルサレム (1901-02)』、『キリスト伝説集 (1904)』など。世界各国で翻訳された『ニルスのふしぎな旅 (1906-07)』が特に有名。1909年、女性として初めてノーベル文学賞を受賞した。
- 4) この時マンが具体的に念頭に置いていた作品は、哲学者カイザーリング (Hermann Keyserling, 1880-1946) の『一哲学者の旅日記 (1919)』、文化哲学者シュペングラー (Oswald Spengler, 1880-1936) の『西洋の没落 (1918, 22)』、文学史家グンドルフ (Friedrich Gundolf, 1880-1931) の『ゲーテ (1916)』、文学史家ベルトラム (Ernst Bertram, 1884-1957) の『ニーチェ (1918)』である。Vgl. Hermann Kurzke: Kommentar zu „Zum 60. Geburtstag Ricarda Huchs“, S. 475.
- 5) フーフのロマン派論は、もともとは第一巻『ロマン主義の最盛期 (1899)』と第二巻『ロマン主義の普及と凋落 (1902)』の二巻本として出版されていたが、1908年以降、それらが一巻にまとめられ、表題も『ロマン主義』に統一されて

今日に至っている。なお、第一巻『ロマン主義の最盛期』は、日本でもすでに昭和8年に『獨逸浪漫派』の表題で翻訳されている。リカルダ・フーフ『獨逸浪漫派』(北通文[訳])岩波書店, 1933年。

- 6) 「永遠に女性的なもの、われらを引きて昇らしむ (Das Ewig-Weibliche/Zieht uns hinan.)」(V. 12110) のこと。
- 7) ヤーコブ・ベーメ (Jakob Böhme, 1575-1624) はドイツの神秘主義哲学者。神の自己顕現という観念や、神の智にして花嫁たる乙女ソフィア (ゾフィー) と結ばれた両性具有の完全な人間 (転落以前のアダム) といったヴィジョンが、ドイツ観念論やロマン主義に影響を与えた。主著は『曙光 (1612)』。
- 8) フリードリヒ・シュレーゲル (Friedrich Schlegel, 1772-1829) はドイツ初期ロマン派の批評家。ドイツ中部の街イエーナで形成された初期ロマン派サークルの中心メンバーの一人。その青年期には活発な評論活動を通じてロマン主義の文芸理論を構築した。1808年にカトリックに改宗。政治の世界に接近して以後はジャーナリストとして活躍した。
- 9) 「第三帝国」とも訳せる言葉だが、もちろんナチスとは関係がない。後の記述からも明らかのように、マンはこの言葉によって、精神と自然、意識と無意識、病気と健康、等の対立のジンテーゼとしての、「人間性」が実現する「より高い段階」の世界を指し示している。マンは、イプセンの戯曲『皇帝とガリラヤ人 (1873)』から借用したこの言い回しを、1912年に書かれたエッセイ「フィオレンツァについて」の中で初めて使い、その後も「スウェーデン日刊新聞編集局への書簡 (1915)」や「ロシア文学アンソロジー (1921)」, 「ドイツ共和国について (1922)」といった評論の中でも使用している。Vgl. Kurzke: a. a. O., S. 476.
- 10) ノヴァーリス (Novalis は筆名であり、本名はフリードリヒ・フォン・ハルデンベルク Friedrich von Hardenberg, 1772-1801) はドイツ初期ロマン派の作家。イエーナ初期ロマン派のメンバーたちと活発な知的交流を行い、数多くの哲学的断章や文学作品を遺したが、29歳の若さで早逝した。主著は『ハインリヒ・フォン・オフターディンゲン (1802)』。
- 11) ヨーハン・ヴォルフガング・フォン・ゲーテ (Johann Wolfgang von Goethe, 1749-1832) の長編小説『ヴィルヘルム・マイスターの修業時代 (1795-96)』のこと。
- 12) ヴィルヘルム・ハインリヒ・ヴァッケンローダー (Wilhelm Heinrich Wackenroder, 1773-1798) はドイツ初期ロマン派の作家。同じくドイツ初期ロマン派の作家ティーク (Ludwig Tieck, 1773-1853) の若き日の親友でもある。主著は、ラファエロやデューラーらルネサンス期の画家への熱烈な賛美や、音楽芸術に対する敬虔な信仰告白を綴った『芸術を愛する一修道僧の心情の披瀝 (1796)』。25歳の若さで早逝した。
- 13) これはマンの勘違いで、続いて引用されている文章はシュレーゲルではなく、

ノヴァーリスの「キリスト教世界あるいはヨーロッパ」からの一節である。Vgl. Kurzke: a. a. O., S. 477.

- 14) この論考は、もともとは1799年11月、初期ロマン派のイェーナでの集まりの際にノヴァーリス(注10)本人によって朗読された演説原稿だった。中世ヨーロッパのカトリック世界を賛美したかのようなその演説はサークル内でもほとんど理解されず、その場に居合わせていた哲学者のシュリング(Friedrich Schelling, 1775-1854)などは、笑止千万であるとして一篇の風刺詩を書いたほどだった。これを面白がったフリードリヒ・シュレーゲルは、当初、双方の作品を「アテネウム」誌(注15)に掲載するつもりでいたのだが、その後ゲーテの裁定により、どちらも掲載されないことに決まってしまった。しかしノヴァーリス自身は、この原稿に修正を加えて、他の演説とともに一卷にまとめ、ナポレオンやヨーロッパの諸侯と民衆に宛てた、来る新世紀に向けての演説集という形で出版するつもりでいたらしい。Vgl. dazu: Richard Samuel: Einleitung zu „Die Christenheit oder Europa“. In: Novalis: Schriften, Bd. 3: Das Philosophische Werk II. Stuttgart u. a. 1983, S. 498-501.
- 15) 1798年にフリードリヒ・シュレーゲルとその兄アウグスト・ヴィルヘルム・シュレーゲル(August Wilhelm Schlegel, 1767-1845)の二人によって創刊された初期ロマン派の機関誌。1800年には廃刊となったが、弟シュレーゲルの評論「ゲーテの〈マイスター〉について」や「アテネウム断章」、ノヴァーリスの断章集「花粉」や長詩「夜の讃歌」など、初期ロマン派の重要な作品が掲載された。寄稿者には他にも、哲学者のシュライアーマッハー(Friedrich Schleiermacher, 1768-1834)や、当時は兄シュレーゲルの妻で、やがてシュリングの妻となるカロリーネ・シュレーゲル(Caroline Schlegel, 1763-1809)などがある。

(ながかわ・さとし 政治経済学部専任講師)